

2020年度
慶應義塾大学体育研究所
基盤研究報告書

慶應義塾大学体育研究所

慶應義塾大学体育研究所・公社)全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム

「コロナ禍のオンライン体育実技を振り返る～今後の遠隔実技のあり方と共に～」

実施報告

～はじめに～

2021年1月30日(土)14:00-16:00、Zoom Meeting を利用し、標記シンポジウムを開催した。参加者は107名(シンポジストらを含む、事前登録者113名)であった。

本シンポジウムの趣旨を以下に示す。

コロナウイルス感染拡大により、体育実技においてもオンライン(遠隔)授業が実施された。遠隔授業の形式はリアルタイム、オンデマンド、それらの併用、対面授業とのハイブリッド型、ハイフレックス型、分散型等、多様であり、各大学において工夫をして対応がとられた。本シンポジウムでは2020年度、遠隔の体育実技がどのように行われたのかを振り返り、その成果と課題を検証する。そして、2021年度からの大学体育のあり方についても考える。

～シンポジスト発表～

コーディネーター(村山、慶應義塾大学体育研究所)の趣旨説明に続き、シンポジストとして以下の4名に発表いただいた。

1. 2020年のオンライン授業対応の概要分析
慶應義塾大学体育研究所：永田直也
2. コロナ禍の立教大学全学共通科目「スポーツ実習」の工夫
～「スポーツスタディ e」の新設、「オンライン授業用スタジオ教室」の設定～
立教大学コミュニティ福祉学部：石渡貴之
3. オンデマンド型「ウエルネスと身体」の展望と課題
ー上智大学必修科目(保健体育研究室)ー
上智大学文学部：原仲碧
4. Zoom を用いたオンライン実技の取り組み事例とその課題
芝浦工業大学工学部：石崎聡之

発表の内容はアーカイブ映像およびパンフレットの要旨(巻末)を参照ください。

シンポジスト発表映像 URL：<https://keio.box.com/s/4l4nm053zsggj1kz4mj9tsh6dzqdc7l>

～ディスカッションの要点および総括～

4名のシンポジストの発表に続き、Zoom MeetingのChatに寄せられた質問への応答をお願いしながら、進行側からいくつかのポイントについて投げかけをし、シンポジスト及び参加者とディスカッションを行った。以下にその要点と総括をまとめた。なお、一部、事後アンケートに寄せられた意見も加えてある。

【ディスカッションの主な内容】

1. 遠隔授業を振り返って

○この一年の経験で新たに発見したこと、良かったこと

- ・学生の家族も取り込めたこと、保護者にも貢献できたのではないかと思う。通学の時間を運動の時間にも使えるようになったことがオンラインのメリットだと思う（石渡先生：立教大学）
- ・どう生きていくか、どう社会に適応していくか等を学習する上で、今年度以上の環境はなかったと感じる。今の状況をどう前向きにとらえるかということが大切だと理解している（原仲先生：上智大学）。
- ・オンラインになったことで、複数のキャンパスで体育を履修することができるようになったと学生からは高評価だった。また、コミュニケーションを取りたくない学生にとっては、オンラインでよかったという話も聞いている（石崎先生：芝浦工業大学）。

○リアルタイム実技の工夫や実施上の配慮について

- ・基本は安全面を考慮してカメラはオン。シラバスにて授業はカメラをオンにして行うことを案内して、それに抵抗のある学生は受講しないという形にした（石渡先生：立教大学）
- ・芝浦大は基本カメラオフが基本であったが、体育実技については、安全面を考慮してカメラオンにした（石崎先生：芝浦工業大学）
- ・慶應義塾大学 SFC キャンパスではリアルタイム実技を通じ、オリジナル体操を作り、コンテスト形式で学部長に審査してもらうなどして、学生がグループを作ってかかわりを持ち、目標へ向かうというプログラムを作った。学生自身がこれを機に自発的に運動を取り入れていくためのスキルなどをビデオ等で学び進めるという側面と、オンラインであってもどうやって関わり合いを深めるかがポイントだと思う（東海林先生：慶應義塾大学 SFC）。
- ・昔遊び、例えばけん玉・お手玉・ジャグリングなどを行い、できないことをできるようにしていくということをやった。バドミントンを通して学ぶことを、昔遊びを通して同じようなことを学べたのではないかと考えている（西島先生：東京都立大学）
- ・ゴミ箱に紙を投げ入れることで、遊びという形でバスケットボールの技術もいれながら日常生活の中でスポーツ的な要素をいれて楽しみながらやれた。ただ、バスケットボールは対人スポーツなので、他者のリズムに適応するということがオンラインで感じることは難しいと思った（永田先生：慶應義塾大学）
- ・オンライン授業ではできることが限定された中で、フィットネス・健康を意識する形で進めた。例えば、ウォーキングしながら四季を感じる写真を撮ってみる、AED マップの場所を確認しながらウォーキングするなど、適当に歩くのではなく、意識をもってウォーキングするなど工夫をした（石渡先生：立教大学）
- ・対面授業ではできなかったことがオンライン授業ではできたこともある。例えば、サッカーの戦術の紹介やトップレベルの試合を見せることはできた。e スポーツも今後考えていかないといけないかなと思う（石崎先生：芝浦工業大学）
- ・剣道では対人競技に入る前段階の学習として、素振りや足捌き、礼作法の所作などを一人でできるようなこ

とを学習させ、学生同士で意見交換やアドバイスをしあう方法をとった。また、身体技法の根本にある歴史や文化なども学べる要素があった。アクティブラーニング形式をとることによって対面に準じるような学習は可能であったように思う（桐蔭横浜大学：高瀬先生）。

- ・パソコンに向かう時間が長いなかで、学生に対してマッサージ・ストレッチなどを提供し、役に立ったという声もあったが、そのためにやっているのかと考えると、大学体育としての存在の価値というのがどこにあるのかという疑問も生じる（原仲先生：上智大学）

☆遠隔授業において、リアルタイム形式ではフィットネス・トレーニング系統の授業内容は概ね良い対応ができたが、スポーツ種目を実施する上では様々に工夫をしたものの難しさがあることが共有された。そこで、遠隔授業の実施を機に大学体育の実施内容として「身体・健康教育」と「スポーツ種目教育」についての考え方について議論を進めた。

2. 大学体育のねらいについて：座学的理論とスポーツ種目実施

- ・スポーツ種目の実施がメインとなって体育を学ぶという授業に対して、原仲先生が発表された上智大学の授業は身体性を通じて体育を学ぶものだと思う。「身体とウェルネス」のテキストに沿って展開される体育は遠隔授業であって何ら変わらないものだったのではないか？（村山：慶應義塾大学・コーディネーター）

→ 上智大学ではコロナ禍の授業でもコンセプトは変わっていないと考える。学生に何を伝えたいかという本質的なところは変わっていない。提供の仕方・アプローチに制限がかかっているだけ（上智大学：原仲先生、島先生）

- ・学生に選択肢を与えるというのもありだと思ふ。運動レベルの違う科目を用意、あるいは対面かオンラインかなど、学生が選べるよう用意することが大学体育では必要だと思う（立教大学：石渡先生）
- ・国際的にフィットネスビジネスがシェアを伸ばし、ICTを利用したオンラインフィットネスはもっと普及すると考えられる。この一年様々な新しい経験をして、学生からのニーズとしてもネット環境の中で授業展開を求める声が高まってくるのではないかと思う（産業能率大学：中川先生）
- ・正直、質の保証は種目によっては難しいと考える。4年間のうちに履修すればよいと考え、今年は特別な年だと考えざるを得ない。チームスポーツは対面と比べると難しいが、それなりの工夫したことは評価しなければならないと思う（立教大学：石渡先生）
- ・オンライン授業では学生に対して一方的にこちらが提供していたものなのかと、振り返らなければならないが、これまでにない工夫を重ねてきたので、質保証はすぐには出てこない。今回のように知見を積み重ねていき見えてくるものではないかなと思う（東海林先生：慶應義塾大学 SFC）
- ・YouTube というコンテンツを用いて複数の授業用動画を作成した。対人の要素を抜いて例えば、ブレイクアウトルームを使用して、オフense・ディフェンス、フェイント、コミュニケーション、チーム戦術等のワークを行った。実際にはボールもゴールもないが、できる限りバスケットボールを実現できるよう工夫した（流通経済大学：小谷先生）
- ・スポーツ実技の独自性をオンラインでどうかですか？ということについて、「メンタルトレーニングによるスキルトレーニング」が、有効性が高いと思う。また、オンライン授業による学生の眼精疲労が深刻で、眼精疲労をとる体操はすこぶる好評でした（長谷川先生：上智大学・一橋大学、*Chat および事後アンケートから）。

☆スポーツ種目を遠隔授業で実施することは、実際の技術習得やその過程の対人コミュニケーションを通じた学びの質保証などに多くの困難と課題があることが共有された。一方で、体育の学びは種目実施のみなら

ず、自己の身体への気づきや日々の運動・トレーニングを通じた健康につなげるべきであり、遠隔授業であっても実施可能な内容がある。我々は、コロナ禍を経て「大学体育で何を学ぶか」を再考し、新たな時代に進化させていく必要がある。この議論を引き続き深めていくべきであることが多くの参加者から寄せられた。なお、この大学体育の本質的なねらいの議論とともにその評価（成績）が遠隔授業でどうあるべきか、という点も極めて重要であると考えられる。しかしながら、この点まで話題を広げることができず反省している。今後の検討課題させていただきたい。

3. 対面授業における感染予防対策について

☆Chat および事後アンケートにおいて、対面授業における具体的な感染対策の工夫に関する質問が寄せられた。しかしながら、この点も時間の関係で話題とすることができなかった。その中で、以下のような情報を提供いただいた。

- ・ゴルフの集中授業は1人1部屋。他人の部屋には行かないように徹底。更衣室は密になるので使用せず、体育館のフロアを使ってイスを5mおきにおいて更衣をさせた。サッカーのビブスは他人が使ったものは使わないようにした。授業開始時に全員消毒を行った（芝浦工業大学：石崎先生）

4. 来年度の展望について

- ・新しい形、新しい取り組みにも注視しつつ、体育をどう学生たちに伝えていくか、我々が研鑽していくかということが必要ではと感じている（慶應義塾大学：永田先生）

- ・オンデマンド・オンラインであっても学生のためになるように引き続き考えていきたい。学生の様々なニーズにこたえられるよう、学生が選択できるように用意していく（立教大学：石渡先生）

- ・我々はできることをやるしかないので、シンポジウム・研修会を通してアイデアを学び、学生にニーズに合わせて実施していくことが大事かと思う（上智大学：原伸先生）

- ・体育実技の質保証ということも考えながら、引き続き、学生のニーズに合わせて応えていけるように頑張っていきたい（芝浦工業大学：石崎先生）

5. 総括

各大学の実践例をご紹介いただき、様々な工夫がなされていた。体育の考え方は多様化して、各大学で目的・意義があるなかで、学生のニーズに合わせて提供していくことも必要だと思う。緊急事態の1年を乗り越えたということで終わるのか、あるいは新しいものを生み出した成果を今後活用していくか、体育を再度考え直す機会であるように思う。今後も研修の機会を作って、先生方に参加していただければと思う。今後の体育について貴重な議論ができたのは大変有意義だった（竹市：国土舘大学・公社）全国大学体育連合関東支部長）。

～事後アンケートの回答内容～

シンポジウム終了時から事後にかけて、意見・感想を自由に回答いただくアンケートを実施した。以下にその内容を記載する。

この度のシンポジウムの開催お疲れ様でした。とてもタイムリーなテーマで非常に参考になりました。ありがとうございました。

とても有意義な情報をありがとうございました。来年の対面の授業に向けての準備と、今年度の授業の反省をすることができました。また参加したいです。ありがとうございました。

急な参加に対応いただきありがとうございました。私たちも含め、COVID19の影響で得られた新しい体育の価値をもっと見出していくべきだと感じています。どんどんチャレンジですね。そういう面におきましても様々な大学やキャンパスの取り組みを聞けるのはとても貴重な機会だと思います。村山先生のファシリもとてもよかったと思います。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

どの大学もご苦労されているのがよくわかりました。ネット配信では、エクササイズやトレーニングには向いているものの、スポーツ種目については改善の余地があると感じました。大東文化大学でも、バドミントンを選択した受講生から、スポーツ全般についての知識は学べたものの、やはり思い切りシャトルを打ちたかった、という感想がありました。今年度は致し方ないと、学生も受け入れてくれましたが、来年度以降は授業科目名と活動内容に違いがある場合、不満が出てくると思います。こんな状況下でも、今年度まとめのアンケートで「教養科目としての体育は必要か」と聞いたところ、受講者合計117名中、92.3%の学生が「必要」と答えてくれました。この学生の思いを裏切らないよう、さらに受講者に満足度の高い授業を保障していきたいと思います。このような場を設定して頂いた先生方に感謝すると共に、さらに情報を共有して大学における体育授業を盛り上げていきたいと思っています。重ねてよろしくお願いいたします。

コロナ禍の大学体育の実態について各大学の事例をもとに検討することができ、自身の担当したオンデマンド授業の振り返りの時間となるとともに、貴重な最新の情報収集の場になりました。各大学によって学生の実態や環境は異なるものの、類似した課題もいくつかあると思われるので、このようなシンポジウムで意見交換することは、コロナ禍での大学体育の最低限の質保証にも繋がると思いました。別のシンポジウムでも話題となりましたが、コロナ禍では、緊急事態宣言に伴う対応が都市部と田舎の地域で異なる点がいくつかあると考えます。コロナ禍での大学体育授業を振り返る際には、学生の住居形態や大学の感染対策の対応別に応じて検討する必要があると考えます。今回はどうもありがとうございました。

素晴らしい内容のシンポジウムを開催していただき、ありがとうございました。いずれもよい授業ばかりですが、参考になりましたが、授業外学習がさらに増やした方がよいとも取れるような発言があったように感じています。学生の一定割合がメンタルヘルスに問題を抱えている状況が報告されている状況で、課題を多くすることは避けるべきと考えます。他の授業とも関連やめざす授業と兼ね合いでむずかしいとは思いますが、大学全体でもコントロールする必要があると思います。

発表していただいた方々の工夫や課題から、本学での今後の活用方法を模索検討していきたいと思います。シンポジウム開催にご尽力いただいた慶応義塾大学体育研究所の皆様と関係各位に感謝申し上げます。ありがとうございました。今後とも、よろしく願いいたします。

発表の機会を与えて頂き、有難うございました。企画から運営まで本当にお疲れ様でした。他大学の取り組みの話聞くことができ、とても勉強になりました。今年は仕方が有りませんでした。終了後に懇談会があると、更に色々面白い議論ができたと思います。コロナのいち早い収束を祈るばかりですね。本当にお世話になりました。

各大学のコロナ過の授業紹介にとどまってしまったので、次に期待。
オンライン授業時の成績評価について詳しく知りたかったが、どの大学もまだ手探りという感じであった。

シンポジウムでは、各大学の実践例（具体的でとても参考になりました）から、体育の考え方で、幅広い貴重なお話を伺える場を作ってください、ありがとうございました。勤務先に合わせた実践ができるようにしていきたいと思います。

議論、意見交換等をより深めるために、シンポジウム自体をやはり対面且つ十分に時間をとって開催できるとよいのではないかと思った。

村山先生がお話しされていた通り、体育とは何かを改めて考えなおし、それぞれの解を見出せるよう、これからは試行錯誤していきたいと思った。

どの先生のお話も参考になりました。ありがとうございました。どなたか忘れたのですが、実技を演習にかえたという話がありましたが、その違いがどこにあるのか、わかりませんでした。

多様なオンライン授業、感染症対策にふれることができ貴重な時間でした。ありがとうございました。

本日のシンポジウム、貴重なお話を聞いて大変勉強になりました。ありがとうございました。終わりの未だ見えないコロナ禍で、大学体育のあり方を色々と見直していかなくてはいけないのだと改めて感じております。今年度の大学の授業を振り返るとオンラインで対応を出来る部分はかなりあったと感じる一方、私が持つアクアフィットネスといった、プールなど特別なファシリティを利用する授業のなかでは、どうしても対面で行いたい部分がある事は否めません。とくにウォーターリスクを体験するには水深のあるプールの利用は欠かせないプログラムであります。対面とリモートによる授業をシフト調整し学生数が多くならないなどの策を講じ、新たな試みも行って行かなくならないと考えています。

最後に村山先生が投げかけられた「これからの大学体育は何を学ぶのか？」が重要なポイントだと感じました。遠隔・対面での方法論ではなく、身体をどう捉えるか、今後ますます日常から身体活動が失われえていくなかで、教養体育のあり方をぜひ考えていきたいと思いました。様々な事例報告ありがとうございました。

今日はありがとうございました。最後の「スポーツ実技の独自性をオンラインでどういかにするか？」ということについてですが、「メンタルトレーニングによるスキルトレーニング」はかなり有効性が高いのではないかと 思われます。また、オンライン授業による学生の眼精疲労が深刻な健康上の問題に感じています。眼精疲労をとる体操はすこぶる好評でした

今年度の他大学の状況がよく分かり、非常に参考になりました。ただ、大規模な大学では可能なことも、小規模の大学では無理なこともあるので、小規模校の実情も知りたかったと思います。

とても良かったです。

本日は大変貴重なお話を伺える機会をご企画いただき誠にありがとうございました。企画運営に関わられた先生方に感謝申し上げます。他大学での取り組みだけでなく、今後、大学体育の授業がどうあるべきかという深いところまで考えることができる有意義な時間となりました。今後もこのような機会があると大変有難いです。3月の大体連指導者研修会にも参加させていただきます。今後ともよろしく願いいたします。

テーマ、内容ともにとっても興味深く、満足のいくシンポジウムでした。企画、運営してくださった関係者の皆様に感謝いたします。

色々あった1年間で改めて振り返る機会となりました。「大学体育で何を教えるのか」という問いを何人も先生方が持たれていることを知り、そのような議論が広がっていくことの大切さを確認しました。特に本日の村山先生の投げかけを拝聴しながら、「体育は対面でなければならない」というこだわりは大切だけれども、ただ単に種目の練習やゲームをしたいというためだけにそのような主張をしても通用せず、もう少し積極的な身体経験だとか文化を享受するということを明確化して、それに対してオンラインではどの範囲ができてどの範囲はできないのか、ということを整理する必要があると考えました。また、今年度のオンライン実技は私自身も悪戦苦闘しました。学生の中にもオンライン実技なんて何するんだ？無理だろうという気持ちもあったようですが、画面の向こうで体育教員が大まじめに体操や筋トレに取り組んでいる様子を毎週見ることによって、学生の方にも感じることはあったように思います。そして、「あ～やっぱり、オンラインでは限界があるよね」ということを、学生自らも身をもって実感することによって、数少ない対面授業をものすごく大切に組みこんでいた印象があります。つまり、オンライン実技は、満足度の高さを徹底して求めるのではなく、あえて「不満足感」を与えておくことによって、多くのメッセージを伝えることができるのではないかとすることも考えました。乱文で大変申し訳ございません。

今年度の授業を振り返り、来年度へ繋げるにあたり大変参考になりました。本学は今年度の後期は一部の種目で対面授業を実施しましたが、来年度は全て対面で実施する予定です。特に、宿泊を伴う種目（スキー、キャンプなど）をどのように実施していくか、検討中でしたので、芝浦工業大の取り組みを参考にさせていただきたいと思いました。事務局の皆さま、シンポジウムの企画・運営お疲れ様でした。大変有意義でした。

チャットに質問がありましたが、話題には出なかった、感染対策について各大学の対応を聞かせていただきか

ったです。

本学では、次年度もリモート体育を展開していくことが求められており、学内の教員で試行錯誤しています（数日後に検討会議の予定）。そのような状況ですが、本日の議論にもありましたように、リモートならではの体育の可能性（コロナ禍収束後も展開が望まれるようなリモート環境における体育の在り方）を探っていきたいと改めて感じました。お忙しい中、貴重な時間を使ってこのようなシンポジウムを企画して下さった先生方。またご登壇いただいた先生方に深く深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

立教大学の新しい授業づくりが、状況を早急に判断し、学生のために柔軟に対応できた非常に良い取り組みとと思いました。ありがとうございました。

本日はありがとうございました。自身がこの一年進めてきたオンライン授業を客観的に見つめ直す良い機会となりました。その中で、私の一番の懸念事項はやはり成績評価です。真面目にコツコツと行う学生をしっかりと評価できたのか？要領の良い学生に良い成績が偏ってしまっていないかなどです。要領もひとつの能力と考えますが、自己主張の苦手な真面目な学生をしっかりと評価できたのか。自問自答しております。ありがとうございました。

本日のシンポジウム開催ありがとうございました。 体育・スポーツ実技の授業といっても多岐に亘るのが現状だと思います。オンラインでオフラインにどう近づけるのかといった検討を行うばかりではなく、質的保証を考えるうえで、どの種目、内容がオンラインにマッチするのかのエビデンスを今得て、大学体育授業の在り方の新しい展開を検討しておくことが重要な時期ではないでしょうか。 体育・スポーツ授業に限らず、コロナ禍の大学教育において、オンラインの有用性に気付いた点も多々あると思います。今後、一方法論としての、オンライン授業への取り組みは加速すると思いますので、特に、大学体育・スポーツ実技の授業の在り方を検討するにあたって、我々は、産業界の動向や学生ニーズも踏まえた社会全体の動きを注視していく必要があるという感想を持ちました。 オンライン・オフライン・ハイブリッドなど方法論が多様化すると、体育・スポーツ実技授業は与えられた学びではなく、今以上に運動欲求や知的欲求に基づいたより主体的な学修が可能になると考えます。

Zoom でのシンポジウムには初めての参加となりましたが、手元の資料を PC の画面で大きくうつしながら、シンポジストの方々のお話をじっくり伺うことができました。フロアーからの活発な意見交換もなされ、大学で行われる体育について、あらため考え直す機会ともなりました。 どうもありがとうございました。

様々な大学の事情を知ることができ、とても素晴らしいシンポジウムだったと思います。

体育が「単にスポーツ種目を実施するだけ」の科目ではない、ということがこの業界内（体育の世界の中）で合意が取れるかどうか重要だと感じました。今回のシンポジウムに参加されるような先生方は、こうした考えにおおむね合意できるものと思われそうですが、一部の人はやはりスポーツ種目ありきの体育というものから脱却できないのではないかと思います。もちろん、スポーツ種目を通してでないといけないことも、多少はあるかと思いますが（その種目のスキル等）、種目の実施にこだわることなく、シラバスに掲げ

た学習目標の到達のために、最適な方法を選択し実施するということが最も大事なはずですので、そういった考えを業界内全体に浸透させていく必要があるのではないかと考えています。現在、スポーツ種目を中心として実施されている大体連の指導者養成研修会のあり方も再考する必要があると思われます。(上記のような考え方があって、スポーツ種目を実施するのであれば問題ないのですが。)

シンポジストの話を伺い、どこの大学も工夫されているのだなあと勉強になりました。 体育実技は対面にて学生と教員、学生同士のコミュニケーションが大切ではないかと思いました。 またオンライン授業における質の担保は難しいのではないのでしょうか。 非常勤でやらせていただいているオンライン授業ではブレイクアウトルームを使いグループワークやトークをしてコミュニケーションがとれるようにしましたが、実技指導は大変難しかったです。 ありがとうございます。

様々な大学の現場での工夫等を知ることができ、勉強になりました。ありがとうございます。

興味深かったです。事前に質問を集めておいてテーマに合ったについて提示する方法でも、質問が出始めるまでのつなぎにはよかったかもしれない。

大変貴重な機会をありがとうございました。

各大学が試行錯誤しながら工夫していることがわかりました。貴重な発表ありがとうございました。

他大学での取り組みに関する情報収集ができ、有意義な時間となりました。ありがとうございました。

スポーツを通して各大学のカリキュラムの中で何を教えたいのかによって様々な角度からスポーツの特徴やあり方を考えていく必要があると感じました。

2020 年度
慶應義塾大学体育研究所基盤研究報告書

2021年2月12日発行

編集・発行 慶應義塾大学体育研究所

代表者 石手 靖

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL. 045-563-1111 (代表)

<http://www.hc.keio.ac.jp/ipe/>

©2021 Keio University Institute of Physical Education

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。

コロナ禍のオンライン体育実技を振り返る ～今後の遠隔実技のあり方と共に～

日時：2021年1月30日（土）14：00～16：00

シンポジウムの趣旨

コロナウイルス感染拡大により、体育実技においてもオンライン（遠隔）授業が実施された。遠隔授業の形式はリアルタイム、オンデマンド、それらの併用、対面授業とのハイブリッド型、ハイフレックス型、分散型等、多様であり、各大学において工夫をして対応がとられた。本シンポジウムでは2020年度、遠隔の体育実技がどのように行われたのかを振り返り、その成果と課題を検証する。そして、2021年度からの大学体育のあり方についても考える。

コーディネーター：村山光義（慶應義塾大学体育研究所）

シンポジストならびにテーマ

『2020年のオンライン授業対応の概要分析』

永田 直也（慶應義塾大学体育研究所）

【要旨】

COVID-19の感染拡大は、これまで多くを対面で実施していた体育実技に、大きな変更を迫った。慶應義塾大学体育研究所内基盤研究3班（班長：村山光義）は、関東圏内の大学を中心に、COVID-19感染拡大下における授業形態の変化、それに伴う成績評価方法の変化について聞き取り調査を行った。調査では、感染拡大防止を最優先とする中で、各大学が対応に苦慮する様子を垣間見ることができた。本発表では、調査内容のまとめを報告し、COVID-19感染拡大下における体育実技授業の実施形態の傾向を示す。

【略歴】

永田直也（ながたなおや）

慶應義塾大学体育研究所専任講師。専門競技はバスケットボール。研究分野はスポーツ心理学。公益財団法人日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック委員会、スポーツ医・科学・情報サポート事業サポートスタッフ。



公益社団法人
全国大学体育連合

『コロナ禍の立教大学全学共通科目「スポーツ実習」の工夫

～「スポーツスタディe」の新設、「オンライン授業用スタジオ教室」の設定～

石渡 貴之(立教大学コミュニティ福祉学部)

【要旨】

立教大学全学共通科目総合系科目では、スポーツ実習が春学期・秋学期合わせて150コマ設定されており、1年次春学期から履修できる仕組みとなっている。2020年度春学期も例年通り、バラエティ溢れる種目のスポーツ実習を始める予定であったが、その予定は未曾有の事態（COVID-19）により、変更せざるを得ない状況へと変わった。そこで考案されたのが「スポーツスタディe（2単位）」オンデマンド科目の新設であった。

本シンポジウムでは、「スポーツスタディe」の紹介に加え、オンライン実技がスムーズに出来るような「スタジオ教室」をキャンパス内に複数設定したことについて紹介する。

【略歴】

石渡貴之（いしわたたかゆき），博士（理学）。

立教大学コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科教授，立教大学全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想・運営チームメンバー，日本体力医学会評議員，日本生理学会評議員。



『オンデマンド型「ウエルネスと身体」の展望と課題

～上智大学必修科目(保健体育研究室)～

原仲 碧(上智大学文学部)

【要旨】

2020年度、上智大学保健体育研究室では必修科目「ウエルネスと身体」のオンライン授業実施にあたった。オンライン（オンデマンド型）体育実技実施について「フィットネス」「身体のレッスン」を中心とした保健体育研究室の事例から、展望と課題を提起する。様々な状況、環境にある受講学生の「学習機会」「授業内容の質」「成績評価」をどのように担保していくか等、シンポジウム参加者との共有およびディスカッションから、次年度以降に向けた方略と理解をすすめていきたい。

【略歴】

原仲碧（はらなかみどり）

上智大学文学部保健体育研究室常勤嘱託講師。



『Zoomを用いたオンライン実技の取り組み事例とその課題』

石崎 聡之(芝浦工業大学工学部)

【要旨】

新型コロナウイルス感染症拡大という未曾有の事態により、2020年度の体育授業運営については大きな変更を強いられた。芝浦工業大学では前期授業の全てがオンラインとなり、授業回数は開始時期の遅れから14回から12回へと変更になった。このため、実技内容の変更に伴う臨時シラバスを作成し、併せて戸惑いながらも実技で用いる動画や資料の準備を早急に行った。一方、後期については、学科・学年毎の登校日（週1日）が設置されたため、オンラインと対面の両授業が混在することとなり、様々な工夫を凝らす必要に迫られた。

本シンポジウムでは、コロナ禍における本学のオンライン体育授業の取り組み事例とそこから見えてきた課題について報告させて頂く。

【略歴】

石崎聡之（いしざきさとし）

芝浦工業大学工学部情報工学科准教授。

順天堂大学スポーツ健康科学研究科博士後期課程満期退学。

専門は運動生理学，サッカー，日本フットボール学会理事。

